

神戸大学医学部附属病院 放射線部

【施設紹介】

神戸大学医学部附属病院は明治2（1869）年に兵庫県によって「神戸病院」として開設されたのち、病院・大学の組織改編や国立への移管を経て現在の神戸大学医学部附属病院となっています。神戸市中央区の山側、楠地区にある本院は全国の国立大学病院の中では2番目に狭い敷地に大学病院では珍しい美容外科などの診療科37科、専門診療センター20、病床934床、職員約2500名を抱える病院です。1995年の阪神・淡路大震災を契機として、本邦では初の災害・救急医学研究の拠点となる教室を大学に設立、附属病院には救命救急科が開設されました。災害・救急に関しては、兵庫県災害医療センター・神戸市立医療センター等と連携し、地域医療を支えています。

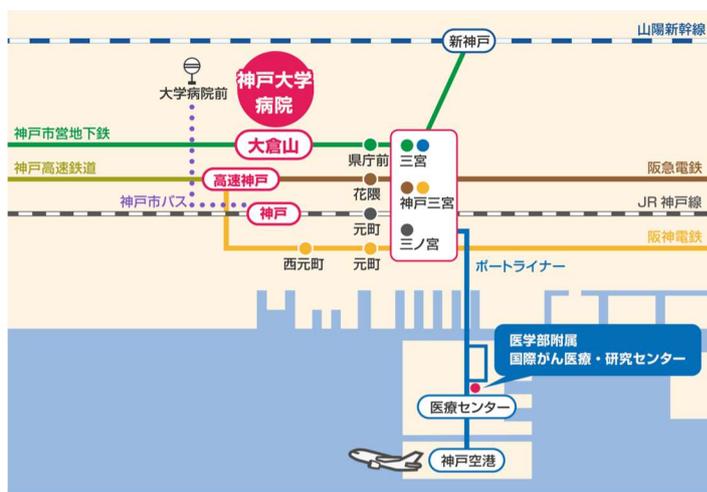


また、神戸市は震災復興事業として「神戸医療産業都市構想」を推進しており、神戸市中央区の南、人工島「ポートアイランド」に先端医療技術の研究開発拠点を整備し、21世紀の成長産業である医療関連産業の集積を図っています。2017年には約350の先端医療の研究機関、高度専門病院群、企業や大学が集積し、当院も分院として国際がん医療・研究センター（ICCRC）を開設、がんに対する手術治療を核に先進的国産手術支援ロボットの開発・

運用に着手しています。

本院・分院（ICCRC）ともに新幹線・空港など遠方との交通アクセスも良く、学会出張などへの利便性も優れています。

阪神間のスタジアム・学会場となるホールやコンサート会場・繁華街・観光地などへのアクセスも良く、公私ともに活用しやすい立地です。



【理念・基本方針】

当院は『最新の医療とやさしい環境をあなたに』をモットーに、「患者中心の医療の実践」「人間性豊かな医療人の育成」「先進医療の開発と推進」「地域医療連携の強化」「災害救急医療の拠点活動」「医療を通じての国際貢献」の6つの基本理念のもと、医療提供機能・教育研修機能・研究開発機能の3つの使命を果たし、臨床医学の進歩と医療技術の向上への寄与、医療を通じて社会に貢献することに尽力しています。

放射線部は『最新の医療は私たちが支える』という自負のもと、日々の臨床における技術の習得はもとより、学術研究、専門技師・認定資格の取得などの自己研鑽を行い、そのフィードバックによってさらに質の高い、より安心で安全な医療の提供を心掛けています。

【組織・体制】

放射線部は、部長（放射線診断・IVR 科教授兼任）、副部長に放射線診断分野医師・放射線腫瘍科医師・診療放射線技師長の3名を置き、その他診療放射線技師55名・インジェクションナース4名（CT・MRI）・事務員5名で構成されています。

診療放射線技師の内訳は技師長の他、副技師長4名、主任技師7名、常勤職員29名、特定有期職員15名、非常勤職員1名となっています。業務部署は本院6部署（一般撮影・CT（3Dlab含む）・血管造影・MRI・核医学・治療）プラス ICCRC から成り立っていますが、2023年度からはより部署横断的な教育・研修・業務を目指し、一般撮影と血管造影、CT・MRI・3Dlab・ICCRC をそれぞれグループ化して人員配置を行っていくこととしています。

【新人教育と人材育成】

新人教育として、基本的には入職1年目は一般撮影・CT・血管造影の3部署を数カ月ずつ、各部署指導者のもとで研修し、半年から1年くらいの間には休日日勤・夜勤が可能となることを目指しています。休日日勤（8:30~17:15）、夜勤（16:30~翌10:00）はどちらも2名ずつで業務についています。2年目以降からは他の人員とのバランスを見つつ、MRI・核医学・治療への配置へと移行していきます。新人を含めた配属先は教育と臨床業務の両面から決定していますが、将来的な専門資格取得について選択の幅が広がるよう、入職後の数年で可能な限り多くの部署を経験できるよう考慮しています。各種資格の取得状況を部内で共有しており、資格取得について保持者へ相談しやすい環境を構築しています。

研究活動についてはノルマを課さず自主性を尊重し、実績をプラス評価する方針で研究支援として、研究したいテーマやモダリティがあれば各部署や有資格者が相談にのります。

また、日本診療放射線技師会・日本放射線技術学会の2学会への入会を強く推奨しており、それぞれの地域学会である兵庫県放射線技師会・日本放射線技術学会近畿部会も併せて学術大会への参加も支援しています。その他、モダリティ別の学会や研究会、医療情報や救急・災害医療関係学会、海外学会への発表者や参加者もいるため、興味のあるものを幅広く情報収集することが可能です。

【部署紹介】

放射線部ではペーパーレス運用を進めており、一般撮影・病棟撮影はタブレットを用いた完全ペーパーレスとなりました。撮影はほぼ FPD で行っています。脊椎・下肢の立位撮影が多いことから一般撮影室 3 室すべてに電動昇降台を導入し、患者さんの負担軽減、安全の担保に努めています。乳房撮影装置は 2023 年 2 月ごろ更新予定で、従来から行っていたトモシンセシスに加え、新たに生検への対応を予定しています。

CT 室では 2 管球 MDCT1 台、160 列 MDCT1 台、296 列・320 列の ADCT 各 1 台の 4 台で年間 45000 件ほどの検査を行っています。低管電圧撮影による造影剤量の減量や逐次近似再構成による被ばく低減、高精細 CT や Spectral Imaging についての臨床研究を進めています。2 管球 MDCT は 2023 年度更新予定のため、現在は新装置の情報収集中です。

血管造影室は手術室のハイブリッド OR と併せて 6 台で年間約 3800 件の検査・治療を行っています。2020 年度末に頭頸部用装置を更新、2021 年度末には IVR-CT、汎用型シングル装置の 2 台を更新し、新装置での臨床への貢献、患者・術者の被ばく低減を目指して運用しています。

MRI 室では 2020 年度末に 2 台、2021 年度末に 1 台の機器更新があり、3.0T 4 台、1.5T が 1 台、OPE 室の術中用 3.0TMRI 1 台で運用しています。放射線治療計画用としての検査も含め、年間約 16000 件の検査を実施しています。

核医学ではサイクロトロンを有し、PET/CT、PET/MRI 検査を年間約 3500 件実施しています。SPECT は心臓専用機、SPECT/CT を含め



て 3 台で年間約 2000 件のシンチ検査を実施するほか、放射線治療病室を利用し、放射性同位元素の内用療法などにも対応しています。2022 年度末には PET/CT の更新、ガンマカメラの更新(SPECT/CT へ更新)を予定しています。

放射線治療室は 2 台のリニアックを有し、高精度放射線治療に対応しています。子宮頸癌等に対する腔内照射治療(RALS)、前立腺癌に対するシード線源永久刺入による密封小線源療法も行っています。リニアックに関しては数年後の更新を目指し院内で検討が始まったところです。

その他、造影剤によるアナフィラキシーショックなど急変時に対応するため、定期的に救急部・放射線科医師と共同で急変時対応訓練を行っています。

【最後にひとこと】

部署の詳細や雰囲気については放射線部のオリジナル HP(「神戸大学 放射線部」で検索)からも見ていただけます。オンライン見学も受け付けていますので、お気軽にお問合せください。